

中国沈陽市のカラス問題について

中国人民日報のホームページ「人民網」のなかに中国沈陽市のカラス問題が取り上げられており、そのコピーを国際センターのシンバ・チャンから戴いた。

沈陽市にカラスが増えているらしいのですが、被害のあり方は東京の場合とちがって、もっぱら糞による被害なのです。東京もカラスによる騒ぎがニュースになることが多いので、このホームページを翻訳してみました。ちょっとした読み物にすぎませんが、中国の街頭風景を想像してみてください。

私が沈陽にいた(1935年)ころにも、同じ経験をしており、そのほとんどがミヤマガラスとコクマルガラスだったように記憶していました。そのことを確認しようと思って、沈陽にいる友人王煉鉄さんに電話をかけて、状況を聞いてみましたところ、意外にもハシボソガラスが最も多く、続いて多い順にハシブトガラス、コクマルガラス、ミヤマガラスの混群とのことでした。

ホームページによると市中全体が被害にあっているようですが、実はほんの一部の地域で、旧満州時代の千代田公園が現在中山公園といわれており、昔植えた樹木が生長して、鬱蒼とした森林になっています。またそこから北へ2kmほど続く南京路と、西へ2kmの沈陽南駅へ続く中華街の二つの道路には大きな街路樹が茂り、これらの樹木をめぐらとするカラスが、10月の下旬頃から次第に数を増やし、ホームページにあるような騒ぎを起こしているのだそうです。ちなみにこれらの地域以外にもめぐらがあるのかと、聞いてみましたが、王煉鉄さんの話では沈陽市には大きな公園緑地がいくつかあり、それらにも樹高の高い林があるのですが、なぜか、めぐらが集中しているのは前述の地域だけだとのことでした。

今は札幌市に住む沈陽出身の胡東宇さんが、かつて鳥学会で沈陽市のヒートアイランドが原因ではないかと語っていたことを思い出しました。

さてさて、沈陽の皆さんはこれから、カラスとどのように関わっていくことでしょうか。

人民日報ホームページ人民網

沈陽市のカラス

沈陽市街のカラス被害騒ぎ

カラスが都市に浸出してきたのは環境保護が成功したからだろうか？

■カラス満天に舞う ■道ゆく人は武装を ■清掃局員の嘆き

■ビルの屋上占拠される ■カラスと住民が窓越しに叫び交わしている

■カラスの糞が毎日100kg、商店街の客の流れに影響

■カラスの都市浸出は環境保護の成果か？過剰な都市拡張に因るためか？

人々の今日までの印象としては、カラスは荒野か、墓地か、枯れ木がお相手と相場が決まっていた。しかし、突然、彼らは大都市に闖入してきた。思わぬ闖入を受けた現代人の生活、このことには少しばかり隠れた何かがありそうだ。この初冬以来、万を越えるカラスが沈陽市に突然浸出してきた。カラスたちは市街地の公園にわずかに生息しているのではない、彼らの制空圏は大都市繁華街の上空に拡大したのである。沈陽市街は満天のカラスに覆われることがある。

カラスはなぜ沈陽へ来たのだろうか？ 記者は最近“沈陽のカラス災害”を調査した。

■毎日100kg以上の鴉の糞を掃除する

沈陽市民はこのカラスについて“招かれざる客”闖入者として、ひとかたならぬ不快感を示す。彼の姿が醜悪で鳴き声がうるさいばかりではなく、彼らが来てから確実に人々の正常な仕事や生活が掻き乱されている。

記者が街頭で質問したところ、市民の多くが“決してきれいだとは思わない！ だってカササギ¹ではなくカラスでしょう、第 排泄物が汚いよ”

またある人は“晴天に黒雲だ。見ろ、何千何万のカラスで空が真っ黒だ。どこから来たのだ。見たこともない。彼らはあんたの頭の上にだっていつ糞をするかわからないのだぞ。夜になると雨が降っているように糞が降ってきて歩くこともできないさ”

と答えていた。

記者が見たところ中山広場付近に多く集まっているようで、路上に沢山の白い糞が見られ、フェンスやガードレールに点々と糞がついており、清掃作業員が絶えず清掃を続けていた。

記者が清掃作業員に訊ねてみた“1日にどれほどの糞を掃除するのかね”

作業員は“どれほどってわかるもんか。ただ朝から晩まで糞の掃除さ、”

清掃作業員は苦勞して掃除をしているけれども、カラスはさらさら“自覚がない”まま空から糞をして、白い糞を街中に撒き散らして楽しんでいるようだ。フェンスやガードレールの糞は掃除が大変だ、いちいち鉄ベラでこそげ取らなければならず、作業員の費用も馬鹿にならない。作業員の話では、カラスの多いときはかき取った糞が、日に100kg以上になる、と。

■商店街の客の流れに影響

満天のカラス、樹には鈴なりのカラス、清掃作業員の増員負担、カラスが厄介な物を、市民に持ってきた。上空をカラスが通過すると、誰もが、カラスの冷たい糞が降ってくるのを、右に左にかわしながら歩くという。記者は沈陽の街頭で多くの人がカラスの糞襲撃を受けて逃げる写真を撮ったのであるが、最後にはそのカメラも、この災いから逃れることはできなかった。

市民はこの災いを避けるため頭には帽子、顔にはマスク、足首までくる編み上げ靴などで頭から足の先まで武装しなければならない。こんな装束を見て“サック入りの人間”と市民たちは苦笑いをしている。ある市民は記者に対して苦笑いしながら“仕方がない。カラスの糞は特別。洗っても洗っても落ちないから”と言っていた。

沈陽市に中華街²という繁華街があるが、ここにもカラスの糞害があり、点々と糞の跡が続き、臭気が漂う。ある住民が記者に、所かまわず、音もなく、空から降ってくるカラスの糞は、買い物を楽しむお客様に大きな影響を与えていると訴えた。実際記者は、この街で古くからあるパン屋が、5時過ぎると店が忙しくなったものだが、現在は店先がさびれてしまったのを見ている。店先からウィンドまで点々とカラスの糞がついており、おやじは、なす術もなくそのウィンドからぼんやりと外を眺めていた。

カラスは少なからず、街の営業に影響を与え、住民たちを混乱させている。住民の王大媽は記者に“カラスが一度来るとバルコニーに留まって糞だらけさ、初めは多くなかったのだけれども、今では増えてしまって、バルコニーは全面糞だらけさ。あんたも一度掃除してみるがいい、掃除をしても、しても、奇麗にならないんだから”と言った。

■王大媽とカラスの戦い

しかし、市民生活がカラスに攪乱されたり、畑にまかれたタネを食べたり、ゴミをあさったり悪業だけと見られているが、これでも害虫を食べる益鳥で、省級保護動物になっている。追い

払うため、危害を与えることもできない。最初から、住民達は耐えなければならないのか、もう長い間耐えたではないか、お役所に届け出るような問題ではないじゃないか、市民はこの問題に対してどうしたら解決できるかと考え始めた。王大媽はその代表的な女性だ。

王大媽の家のバルコニーは解放型で閉めることができない。カラスは毎日彼女の家のバルコニーへ糞を落としていく、彼女は毎晩、時を限らず、バルコニーに出てパンパン、ガンガン、カラスを追わなければならない。

記者が“こんなことが効果があるとおもいますか？”と聞いたら。

王大媽は“カラスは利口だから、あんたが盆をいっぺん叩けば、彼らはすぐ飛び去るし、あんたが部屋へ入るとすぐバルコニーへ戻ってくる。つまり人が常時バルコニーに立って、空からのカラスの糞を浴びながら追わなければならない”と言った。

王大媽は頭に来て、昼間寝て、夜になるとバルコニーに立った、しかしカラスはさらに悪く、彼らはすぐ向側の樹にとまったり、飛び去ったりしながらハア－ハア－と叫ぶだけ。王大媽は持ちこたえられず止めちゃった。

記者が“聞くところではカラス追いで病気になったとか”と聞くと。

王大媽は“当たり前さ、わたしにやもう方法が無くなった”と答えた。

■警戒音声にも驚かない、爆竹にも驚かない。

何とかカラスに飛び去ってもらいたいと、困りはてた住民たちに、毎日掃除に来る作業員が話した。“録音機にカラスの警戒音声を録音して、聞かせればカラスは逃げると思うよ、しかし、効果はわからないがね”と。

記者は清掃員に“カラスを追いだす方法は全く無いのかね”と聞いた。

清掃員は“どんな方法でも逃げようとしなね、あるとき私の同僚が頭に来て、重連の爆竹をいくつか仕掛けたが、逃げようとしなかった”と答えた。

人間がカラスを呼び込んで、しかも、カラスの大軍がこんなに居着いてしまった、その上“あんたたちは、私をどうしようというのかね”といった態度のように見える。“どうしようというのか”と迫られた人間も、こんな大群のカラスがどこから来たのか？なぜ沈陽に来たのか？と、悩んでいるだけなのだ。

■カラス被害は市街地に樹が多く、郊外に樹が少ないことによる

沈陽野生動物保護ステーションの副主任王志豊は、“カラスの市街地侵入”を注意して見ているが、2年以上前からすでに始まっており、原因の究明に努めている。王志豊は記者にカラスの市街地侵入の原因について語った。

沈陽市の都市建設は絶えず拡張と共に緑化、美化が進み、反対に郊外では広範囲にわたり伐採が行われ、カラスのねぐらが失われてしまった。このような状況で、次第に成長してきた市内の樹木にカラスが集まるようになったので、彼らにとって“新大陸”と言うことだろう。

王志豊は“カラスが冬に大集団を作るのは、彼らにしては非常に重要な生活習性なのです。カラスは毎朝、我が中山広場に集まった後、郊外へ移動し、日中は主に沈陽市東部で採食して、午後3時頃頃から続々とねぐらへ帰ってくる。この現象は中山広場付近の樹木に関係があり、中山広場付近の樹種は主として楊(ヤナギ)で、樹高が高く、樹冠の形がねぐらに利用しやすいためカラスは中山広場に集まってくるのです”と説明した。

王志豊は、人々の環境保全意識が高まったことが、カラスが沈陽市街を愛するようになった重要な原因であることを認めた。彼は“野生動物に対して環境の与える影響は非常に大きい。それは、人が考える以上に環境適応性があるのです。

環境が良好ならば、カラスの数は増えるでしょう。1999年頃からカラスの数が増え始めたことは、同時に沈陽市の環境が良くなったという一面を示しており、市民の自然保護意識の高まりを顕していることでもあります。と語った。

また他の専門家は、記者に対して、カラスが沈陽市街へ侵入してきたことは自然現象で、都市建設のあり方に警鐘を鳴らしているのであって、我々が大建造物によって都市を変貌させたと同時に、周辺地域の生息環境を変化させた影響です。一旦破壊した大自然の均衡を、簡単に回復できるなどと思っはいけないと語った。

■カラスの大軍を撤退させる、よい謀りごとはないのか

現在のところ、カラスと人間の摩擦をどうやって解決するのか、カラスの大軍をどうやって撤退させられるのか、人々は、諦めてしまっ、その有効な方法を、まだ探しだせずにいる。

記者が道行く人に“カラスの都市侵入”の意見を聞いて得られた回答には、好意をもっている人もいた。

“良いことじゃないのかな、鳥が何時もこんなに多いというわけではないし、突然こんなことが起こったとしても、自然環境の保持に間違いがなかったことを示していると思う”

と答えた人がおり、また、タクシー運転手は

“彼らだって生き物じゃないか、沈陽の自然環境が良くなったことで、自然環境が良くなったからこそカラスが帰ってきたので、カラスも帰ってこないのでは、何が環境保全と言えるのだよ”

そんな話をしている間にもカラスの糞がタクシーの上に降ってきた。運転手はこれを見て“やられた！ かまわん、かまわん”と言いながら走り去った。

訳注

*1 カササギ、中国名は「喜鵲」といっ、幸せをもたらす鳥とされている。

*2 我々にとって、日本やアメリカの中華街は理解できるが、中国の中華街は少々奇異な感じを受ける。しかし、沈陽には現実に中華街という駅正面に続く大きな道路がある。

記者 丁曉音・宗長宏 <北京青年報>2002/2/10 より

中国インターネット 人民網 WWW.peopl.ne.jp の掲載より

訳 福井和二